

ドイツ・歴史都市クエドリンプルグにおける観光と地域社会の関係

The Relationship of Tourism and the Local Society in the Historic City of Quedlinburg, Germany

渡邊 真菜美

WATANABE Manami

1. はじめに

(1) 研究の背景

遺産資源^{注1}を有する自治体では、人口の減少や経済の停滞など地域社会が縮小する中、地域活性化の関心から住民不在で観光地化が進行する可能性があり、歴史都市^{注1}においても変化する地域社会と遺産観光のあり方を再考する必要がある。

地域社会との関係から歴史都市の観光地化を扱った研究では、観光客増加による混雑や伝統的な建築物の改変など、観光地および文化遺産地全般に共通して見られる問題が主に扱われ、文化的・歴史的な資源が観光対象となり、かつ都市という歴史都市の性格を踏まえた分析がより必要である。また、観光地化のために域内からの住民の転出や地元商業の排除が生じるなど、観光により地域社会が一方向的に影響を受けることが想定されており、変動する地域社会の状況を踏まえ観光地化の様相を考える必要がある。

(2) 研究の目的

以上の背景から本研究では、地域社会が構造的に変化しつつある歴史都市を対象に、観光地としての発展と地域社会の変化の関係性を明らかにすること、その上で今後の遺産観光と住民の生活を含めた地域社会のあり方を検討することを目的とする。

(3) 研究対象

対象地としたクエドリンプルグをはじめ旧東ドイツ地域の地方中小都市では、1990年の東西ドイツ統一以降、国営工業など社会主義体制下での基幹産業が崩壊したために人口が流出、地域の経済・社会が衰退する一方、東ドイツ時代に荒廃していた歴史的建築物群が地域内外から注目され、連邦政府やヨーロッパ連合の支援を受けた修復保全事業と観光への利用が進んできた。

クエドリンプルグは、市域の中心部（本研究では「歴史地区」と呼ぶ）に中世から17世紀のハーフティンバー様式^{注2}の木組み建築2,000棟以上が密集し、10世紀のロマネスク様式の教会建築や遺構が残存し、歴史的建築物群としてはドイツ最大の規模である¹。1994年

に“Collegiate Church, Castle and Old Town of Quedlinburg”

（クエドリンプルグの聖堂参事会教会、城館、歴史地区）としてユネスコの世界文化遺産に登録されている。

このような強力な観光資源を有し、さらに1990年以降は市行政によって歴史的建築物の修復と観光を核とした地域再生が図られた結果、かつては限定的に行われていた観光が過去二十年間で著しく発展してきた。地域社会の劇的な変化と同時に急激な観光地化が見られ、双方の変化と関係性の把握が可能な都市である。

現在、年間約100万人の観光客数が訪れ、大半を車か観光バスを利用する日帰り客が占めており、中・高齢層、中・高所得層、国内旅行者が多いのが特徴である²。観光は発展してきたが、失業率は約20%に上り人口の減少も続いており、地域社会の衰退は進行している³。

(4) 研究方法

以下の構成に基づき対象地の空間の変化を分析した。

①クエドリンプルグ歴史地区の概要、歴史、都市構造の発展過程から対象地の空間の特性を把握した。

②資源価値の分析

遺産資源とその価値、観光資源を把握し、主要な観光資源に対する一般および行政の認識を分析した。

研究方法是世界遺産の保全管理関係資料などの文献の調査と、観光資源についてはガイドブックや無料パンフレットなど観光用情報媒体の分析、および現地でのヒアリング(後述)を行った。

③空間利用の分析

観光および地域社会による対象地の空間利用の現状と1990年以降の変化を、背景や要因と合わせて分析した。本研究では主に居住、観光、商業活動による空間利用を取り扱い、商業については観光と関連が深い小売業、飲食業を対象とした。

研究方法是世界遺産の保全管理関係資料や対象地に関する書籍、各種の観光用情報媒体、および現地でのヒアリング(後述)と事後提供を受けた情報の分析によった。

ヒアリングは、クエドリントブルグ市建築課の世界遺産担当と観光局 Quedlinburg Tourismus GmbH のディレクターに対し 2014 年(平成 26 年)6 月に行った。

2. クエドリントブルグ歴史地区の空間特性

クエドリントブルグ市はドイツ中部ザクセン・アンハルト州に位置し、総人口は約 21,000 人(うち約 5,600 人が歴史地区に居住)、ベルリンなどの大都市から離れた丘陵地帯の小都市である⁴。歴史地区は市壁に囲まれた中世都市の構造を残す市域で、世界遺産登録範囲とも一致し、川に沿って以下五つのエリアで構成される。

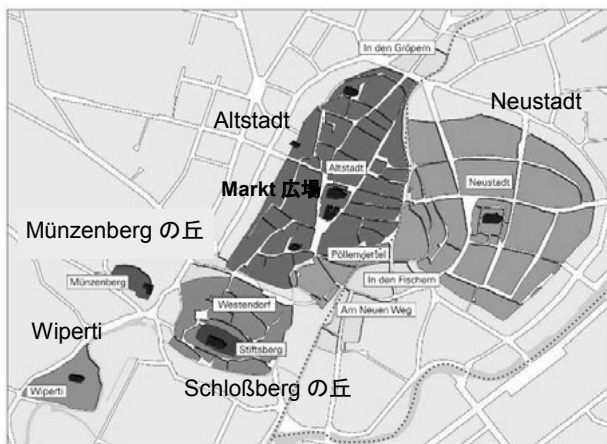


図 1. クエドリントブルグ歴史地区の構成

木組み建築物が集まる Altstadt (旧市街) と Neustadt (新市街)、ロマネスク様式の傑作とされる St.Servatius 教会と中世の修道院の城館が Schloßberg の丘、ロマネスク様式の修道院跡が残る Müntenberg の丘、同様式の教会納骨堂を持つ Wiperti 地区である。

歴史的には、10 世紀、Schloßberg に中世ドイツの王国と神聖ローマ帝国の王・皇帝の居城および帝権直属の女子修道院が置かれたことで、二つの丘周辺が発展しロマネスク様式の教会群が王権によって築かれた。

1000 年頃から Altstadt に市場集落が形成され、アルプス-北海間の遠隔地商業の経由地として発展し、人口増加を受けて 1200 年頃に Neustadt へ市域が拡大した。16-18 世紀には市民の経済力を背景に多くの木組み家屋が築かれた。19 世紀以降の開発で初めて中世都市の構造を越えて市街地が広がり、この範囲が世界遺産登録のバッファーゾーンに相当する。

3. 資源価値の分析

(1) 遺産資源

世界遺産マネジメントプランに基づき、クエドリントブルグ歴史地区の主要な遺産資源を「建築遺産」「空間構成」「都市景観」とし分布を表 1 の通りに把握した⁵。

木組みの家屋群やロマネスク様式の教会など、「建築遺産」は五つのエリア全域に見られる。「空間構成」では Altstadt と Neustadt において街路、区画、広場、水路、市壁などの配置が中世の都市形成当初の状態を保っていることが評価された。「都市景観」については、二つの丘と Neustadt に建つ教会や修道院(Münzenberg は遺構のみ現存)が、歴史を通じて街のスカイラインを特徴づけ、中世、近世にきわめて近い遠景が持続してきた。

Neustadt には全ての種類の遺産資源において高い価値が認められる。12 世紀の Neustadt の形成によって現在に至る都市の構造と景観が完成し、歴史的遺産としてクエドリントブルグを考える上で不可欠な市域である。

表 1. クエドリントブルグ歴史地区各エリアの遺産資源

Altstadt	Neustadt	Schloßberg	Münzenberg	Wiperti
建築遺産 空間構成	建築遺産 都市景観 空間構成	建築遺産 都市景観	建築遺産 都市景観	建築遺産
主な建築物等				
木組み建築群 Markt 広場 - 市庁舎 - 教会	木組み建築群 St. Nikolai 教会	St.Servatius 教会 旧修道院城館	修道院跡	納骨堂

※太枠=主要な観光資源、下線=ランドマーク

(2) 観光資源

歴史地区内では、建築物の他に特定の広場や通り、博物館やギャラリーなどが観光資源となっている。

観光客向け情報媒体での記述や写真の登場頻度、および観光局のマーケティング施策から、主に Altstadt 中心部の Markt 広場と Schloßberg の丘が主要な観光資源として位置づけられていた。

Altstadt Markt は市庁舎とその背後の教会、Schloßberg は St.Servatius 教会と修道院城館という、ともに視覚的に強いインパクトのあるランドマークを中心とする。

他の三つのエリアは情報媒体での出現頻度が低く、観光局も来訪者の誘導に力は入れておらず、取扱いに差が見られた。



図 2.3. 主要な観光資源

観光用情報媒体で頻出する街を代表するイメージ

上 : Schloßberg の丘 下 : Altstadt Markt 広場

(3) 遺産資源と観光資源の価値評価の差異

遺産資源の価値は歴史地区全域に認められ、景観や空間構成など都市特有の面的な資源も含み、都市全体が評価されている。主要な観光資源は遺産資源全体の一部で、建築物という点的な資源、とりわけ形態的にわかりやすいランドマークが注目され、限定的な評価である。景観や空間構成などの面的資源には形態のわかりにくさが認められる。

表 2. 遺産資源と観光資源の価値評価

遺産資源	観光資源
全体的評価	限定的評価
<ul style="list-style-type: none"> 歴史地区全域に分布 面的資源 <ul style="list-style-type: none"> - 景観 - 空間構成 	<ul style="list-style-type: none"> 一部の場所に限定 Altstadt Markt: 市庁舎+教会 Schloßberg: 教会+城館 点的資源 <ul style="list-style-type: none"> - 建築物 - ランドマーク

4. 都市空間利用の分析

(1) 居住利用

空き家率と人口動態から居住利用の状況を把握した。

2011 年時点でクエドリンプルグ歴史地区の全建物における完全空き家率は居住用途建築で 14%、商業用途では 23%であった⁶。東ドイツ時代に歴史的建築物群の保全状態が悪化していたために多くの空き家が生じ、1990 年以降も膨大な建築物の修復が追いつかない状況にある。

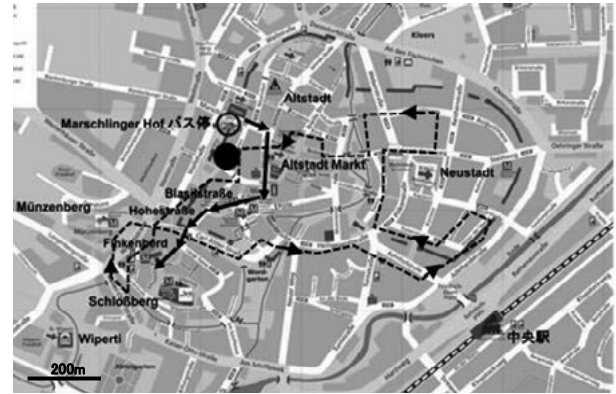
住民人口は、東ドイツの基幹産業だった金属工業が破綻したことで激減し、以降も雇用の悪化が続いているため市全域で減少の一途を辿っている。歴史地区内では Altstadt を中心とする西側一帯は増加傾向にある一方、Neustadt では減少している⁷。

Neustadt を中心に域内全域で居住利用が低下しているといえる。

(2) 観光利用

(i) 観光客の域内動向

大多数の来訪者は歴史地区北西部のバス停に到着し、主要な観光資源の Altstadt Markt と Schloßberg に集中する。両地点間を沿道の商店を眺めつつ歩き、Markt 広場や Schloßberg に並ぶカフェなどで寛ぎ、同じ道のを戻る訪れ方がパターン化している。

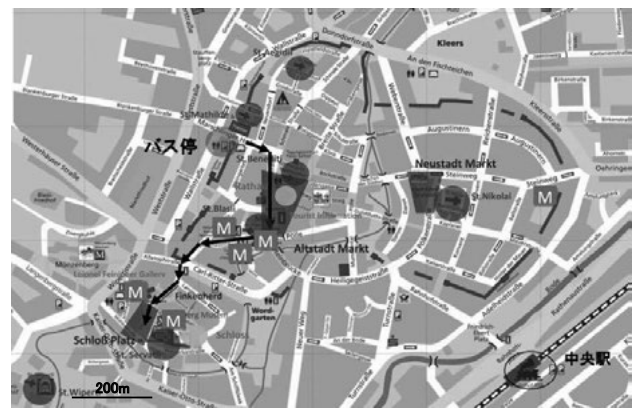


→ 徒歩での典型的な移動ルート
--> トローリーバス運行ルート ● 同乗降所

図 4. 観光客の域内動向 注 3

(ii) 観光資源の域内分布

前章で特定した観光資源化された建物や施設の多くが、観光客が最も訪れる範囲と同様に Altstadt Markt-Schloßberg 間に分布している。



■ 広場 ● 教会、市庁舎、城 M 博物館など文化施設

図 5. 歴史地区における観光資源の分布

(iii) 観光インフラ

現在、Altstadt Markt と Schloßberg 周辺に設置されている歩行者専用ゾーンおよび観光客を乗せて域内を回るトローリーバスについて整備状況を把握した。

・ 歩行者専用ゾーンの拡大

1970年代に観光客の増加を見込み Altstadt Markt を中心に設置され、1990年以降拡大が進んだ。Altstadt Markt から周辺の路地、Schloßberg、近年では多くの観光客が来訪するバス停に向かって伸張し、観光客の域内動向のパターンと一致した拡大傾向が認められた。

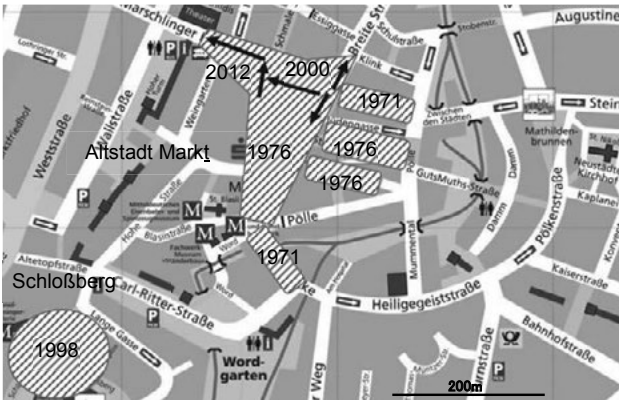


図 6. 2012年までの歩行者専用ゾーンの拡大
※地図上年数は整備年

・ 観光用トロリーバス（図 4 のルート参照）

民間業者が運行する機関車の形の有料路面バスで、運転手のガイド付きで 45 分間で街を一周する、観光利用に特化したものである。

バス停と Altstadt Markt 広場の間に受付所と乗り場が設置され、Markt から Schloßberg へ直行し、歴史地区内を巡って元の乗車地点へと戻る。途中に停車駅はなく、Münzenberg、Wiperti はルートに含まれない。

ルートや所要時間から、日帰り観光客の需要と観光客の来訪パターンが意識されていることがわかる。

観光客の体験を特定ルートに限定する効果が強く、また住民と接することもなく車上から通りの外観のみ眺め、短時間で街を去ることが可能であり、地域社会との隔絶性が高い点が特徴である。



図 7. Altstadt Markt のトロリーバス^{注 4}

(3) 商業利用

(i) 現状

現在、小売商店、飲食店の集まる中心的な商業集積地は図 8 の通り観光利用の活発なエリアと一致する。広場と通りに面し、歴史的な木組み建築の主に一階部分に小売業や飲食業が展開している。

婦人服や靴、インテリア、アンティーク、陶器など高価格帯の商品を扱う店舗が多く、主要な来訪者層である中高年齢層や中高所得層との関連性が考えられる。Altstadt Markt 広場、Schloßberg の丘上の広場には高価格帯のレストランとカフェが並び、主に観光客が利用している。

生活に関連した商店は対照的に少なく、食糧品を扱う店舗やスーパー、ドラッグストアは歴史地区内にはほぼ見られない。全国的チェーンや有名ブランドがなく、歴史地区内外のクエドリブルグ市民など個人や家族が経営する小規模な事業が中心である。

(ii) 中心的商業集積地の変遷

クエドリブルグ歴史地区内では 1990 年以降商業店舗数が増加したが、同時に中心的な商業集積地が図 8 のように移動しており、観光利用の集中する一帯に新しい店舗が現れてきたことがわかる。かつての中心だった Neustadt など観光の主要ルートから外れた場所では空き店舗や閉店した店が多く見られ、商業利用が後退している。

新規事業の多くが住民ではなく観光客を対象にしていたとされ、また 1990 年から 5 年間で食糧品や日用品を扱う店舗が半減し服飾関連の店舗がほぼ倍増する⁷など、日常生活に対応した商業構成から、高価格商品および観光客対象の事業を中心とした現在の状況へ移行してきたことがわかった。

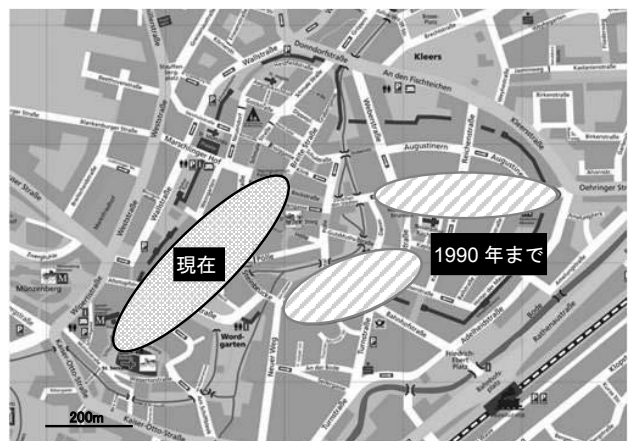


図 8. 1990年以降の中心的商業集積地の移動

(iii) 歴史的建築物の商業用途での利用状況

商業用途では Neustadt や Altstadt 北部で高い空き家率が見られ、さらに空き家の損傷率も高い傾向にある⁸。

Neustadt 等では大型の木組み家屋が多く修復費用の負担元を見つけるのが難しい上、歴史地区内では観光の展開が遅れ、経済的な期待の低さから商業目的での歴史的建築物の修復が進みにくかった⁹。

Altstadt 中心部と Schloßberg では観光営業を目的に修復に投資する動機が高まりやすく、観光客を対象とした事業の増加につながったと考えられる。

(iv) 商業利用変化の社会経済的背景

・ 行政と住民

これまでクエドリントブルグ市では商業地区全体の開発に関する具体的な計画を持たず、前述した商業地の変化における行政の関与は少なかったと考えられる。

一方、一部の住民が観光客の増加に刺激されて所有する歴史的建築物の修復と改装、新規事業を始め、近隣住民に同じ動きが波及し、それまで商店の展開や修復が行われていなかった通りが変化していく傾向が広く見られた。

行政のコントロールが弱い中、住民が観光客の動きと嗜好に随時反応してきた結果、観光客が主に訪れる範囲に集中して、歴史的建築物の修復と観光客対象の新規事業への利用が進んできたと考えられる。

・ 域内商業の変容

東ドイツ時代、クエドリントブルグおよび周辺の諸都市では食糧品、嗜好品等が市内の小売業の過半数を占めていたが、市場経済への転換の影響を受けその多くが姿を消した¹⁰。

供給不足が課題となる中、古い都市構造を残し区画の小さい中心部は新たな商業施設の設置に適さなかったことから、1990年代半ばから2000年前後に、多くの都市の郊外にショッピングセンターや大型スーパーが進出した。住民の日常的な消費活動は域内ではなく、主に車を利用し域外で行われるようになった。

クエドリントブルグ歴史地区でも域内商業の空洞化が進み、経済の救済策として観光への期待が高かったことも重なり、観光関連事業が歴史地区内に展開しやすい状況が生まれたと考えられる。

以上より1990年以降、クエドリントブルグ歴史地区では表3が示す通り、観光が集中する Altstadt 周辺と観光の発展が乏しい Neustadt の双方が、住民の消費活動によって利用されなくなっていることが明らかとなった。

表 3. 歴史地区の商業利用の変化

Altstadt Markt-Schloßberg	Neustadt など
域内商業の変化 (生活関連の事業の消失、域外に消費活動が移行)	
↓ 観光の発展	↓ 観光の展開が遅れ
修復の進展 (商業用途)	修復の遅れ、空き家化 (商業用途)
商業利用の活発化 観光客中心の商業構成に移行	商業利用の低迷
↓ 住民の消費活動の低下	

5. まとめ

(1) 1990年以降のクエドリントブルグ歴史地区の変化

(i) 地域社会の変化

東ドイツ崩壊以降の社会経済的な変化によって1990年以降、居住と消費の両面で住民の域内利用が低下しつつあった(表4)。この状況下で観光が発展した結果、Altstadt Markt-Schloßberg は観光客を対象とした空間となり、観光の展開が遅れた Neustadt などでは空き家化や修復の遅れから消費活動がさらに行われなくなるなど、住民による域内利用の低下が一層進行している。社会変化によって生じていた生活領域の縮小を観光地化が助長してきたといえる。

表 4. 地域社会による歴史地区の利用の変化

Altstadt Markt-Schloßberg	Neustadt など
1990年～ 住民の利用低下	
居住： 人口減少 ← 地域経済の衰退 空き家化 ← 修復の遅れ	
消費： 域内商業の変化 (表3参照)	
↓ 観光の集中 観光客中心の空間へ	↓ 観光の展開の遅れ
↓ 住民の消費活動の低下 (表3参照)	
↓ 住民の利用低下	

(ii) 観光地としての発展

対象地の遺産資源の一部にすぎない、形態のわかりやすいランドマークに観光資源としての認識が偏り Altstadt Markt-Schloßberg 間に集中して観光が発展する傾向が顕著であった。観光客の来訪は同範囲においてパターン化し、他の観光資源やインフラ、商業活動、建物の修復なども集中的に展開し、事業内容も観光客を対象としたものに変化した。特定の範囲で観光活動に特化した空間が作られてきたといえる。

Neustadtをはじめ、形態のわかりにくい面的な資源を有するエリアは観光資源として認識されず、観光関連の空間利用も乏しい状況にある。

歩行者専用ゾーンの整備や観光関連の店舗が増加した経緯から、ランドマークへの集中の背景には行政や住民が観光客の動向に従う受身的な傾向が見られた。

また歩行者専用ゾーンなどのインフラ整備によって観光客の動きはAltstadt Markt-Schloßberg間に固定され、観光行政もランドマークへの来訪を促してきたことから、特定の範囲に観光客の体験を限定する傾向が観光振興において強かったといえる。

(2) 考察

対象地では域内の遺産資源に形態のわかりやすさの点で明確な差があり、ランドマークに来訪者が引き付けられやすい資源特性がある。さらに1990年以降、住民の域内利用が低下し、活気やにぎわいが歴史地区全体で失われてきたことが重なり、ランドマークへの観光の集中がより促されたと考えられる。

Neustadt等は、空間構成や景観など面的な資源に高い価値があるが、形態がわかりにくい上に、住民が街を使わなくなったことで人気のない、閑散とした状態となり、来訪の意欲が一層そがれてきたと考えられる。

観光の発展だけではなく、生活領域の低下の背景にある、地域社会、地域経済の構造的な変化が重なり、双方によって対象地の空間が変化してきたことが明らかとなった。従来、観光地化による地域社会への一方的な影響が論じられてきたが、本研究では観光地としての発展と地域社会の変化に相互的な関係性が認められた。

(3) 遺産観光における課題

域内の遺産資源のごく一部であるランドマークに偏って観光が発展し、その結果Altstadt周辺とNeustadtの双方で住民がより一層街を使わなくなっている。ランドマーク周辺では観光客を中心に空間が作られ、トローリーバスに象徴される地域社会と隔絶した観光が展開し、テーマパークのような状況といえる。

したがって、人が暮らす都市としての本来の機能を観光振興において認識していく必要がある。

また観光客にとってわかりやすい資源のみを強調し、体験を限定している点で、地域が有する資源全体の価値が考慮されておらず教育的側面でも課題がある。

(4) 提言

以上の課題よりランドマークへの集中を緩和し、形態ではわかりにくい面的な資源を持つNeustadtなどに

観光客の回遊を促すことを、住民と観光客の交流や資源価値の伝達も合わせて図る必要がある。

住民の利用低下による街の活気の喪失もランドマークへの集中を助長させてきたことから、観光利用の乏しいNeustadt等における住民の利用を促進する必要がある。そのために観光や文化遺産保護の枠組みを越え、まちづくり全体として取り組むことが求められる。

居住利用の向上は、地域経済の回復と資金調達も含めたさらなる修復事業によるところが大きいが、消費活動では商業振興との連携が考えられる。

都市の記憶として、かつて消費の中心として利用されていたNeustadtの一角での修復を推進し、観光客だけでなく住民も気軽に利用できる店舗を展開するなどの施策が検討できる。住民にとって魅力的な空間づくりを進めることで、居住促進への効果も期待される。

さらに視覚的にも来訪を促すため、道の曲がり方など空間特性を利用し形態のインパクトが無くても先に進みたくなるような空間を、資源価値を伝えるインタープリテーションツールを含めて整備する必要がある。

参考文献

- 1) The State of Saxony-Anhalt : International Building Exhibition-Urban Redevelopment Saxony-Anhalt 2010, Ministry for Regional Development and Transport Saxony-Anhalt, p.22, 2010
- 2) 同上, p.11
- 3) Stadt Quedlinburg : UNESCO-Welterbe Quedlinburg Stiftskirche, Schloss und Altstadt, Wenn Häuser schreien könnten-ein Hilferuf, Stadt Quedlinburg, p.10, 2011
- 4) Stadt Quedlinburg : UNESCO-Welterbe Quedlinburg Stiftskirche, Schloss und Altstadt Welterbemanagementplan, Stadt Quedlinburg, p.21, 2013
- 5) 同上, p.31
- 6) Stadt Quedlinburg, 前掲書, p.4, 2011
- 7) Stadt Quedlinburg : UNESCO-Welterbe Quedlinburg Stiftskirche, Schloss und Altstadt Integriertes Stadtentwicklungskonzept, Stadt Quedlinburg, p.73, 2012
- 8) Manfred Nutz : Stadtentwicklung in Umbruchsituationen, Erkundliches Wissen 124, Franz Steiner Verlag Stuttgart, p.170, 1998
- 9) Stadt Quedlinburg : UNESCO-Welterbe Quedlinburg Stiftskirche, Schloss und Altstadt Denkmalpflegeplan mit Leerstandsanalyse, Stadt Quedlinburg, pp.106-107, p.114, 2013
- 10) 同上, p.112
- 11) Nutz, 前掲書, p.166

注

- 1) 歴史的な要素を多く残す都市を本研究では「歴史都市」とした。景観や空間構成も含め過去から継承された具体の事物を「遺産資源」と表した。
- 2) 柱・梁・筋違などの骨組みを外にむき出しにし、その間に煉瓦・土・石を充填して壁とする西洋木造建築の様式。
- 3) 徒歩観光客の域内動向は現地ヒアリングから把握した。トローリーバスの運行ルートは運営会社のウェブサイトを参照した。
"Quedlinburger Bimmelbahn" <<http://www.quedlinburger-bimmelbahn.de/fahrtroute.html>> (2014/11/19)
- 4) "Staedte-Fotos.de, 2014. 'Café am Rathaus plus Bimmelbahn.'" <<http://www.staedte-fotos.de/bild/Deutschland~Sachsen-Anhalt~Landkreis+Harz.html>> (2014/11/19)